

あなたなら、どう考えますか？——本書は、古代から現代に至る西洋の過去に関して、真実＝正解を求めて幾通りもの主張が戦わされているポイント、すなわち「論点」だけを集めたテキストです。「論点」に触れ、主体的に思考することで、歴史学ならではの醍醐味が味わえます。各項目は〈史実〉〈論点〉〈歴史学的に考察するポイント〉の3パートから構成され、語句説明やクロスリファレンスも充実。世界史の知識がなくとも理解が進む工夫が満載！

[ここがポイント]

- ◎ 西洋史学の論点を139項目集成し、史実とともに提示。〈歴史学的に考察するポイント〉として、ゼミや講義で議論する際の手がかりを示す。
- ◎ 西洋史を中心に、気鋭の執筆者から重鎮まで、学界の第一線の執筆陣。

はじめに

準備体操1 歴史学の基本

準備体操2 史料と歴史家の偏見，言葉の力と歪み

本書の使用法

I 西洋古代史の論点

- 1 ホメロスの社会
- 2 ポリス形成論
- 3 歴史叙述起源論
- 4 ブラック・アテナ論争

- 5 アテナイ「帝国」と民主政
- 6 アケメネス朝ペルシアの表象と現実
- 7 アテナイの演劇と社会
- 8 アレクサンドロス大王と「ヘレニズム論争」
- 9 ヘレニズム期の王権とポリス
- 10 古代ギリシアの連邦とその受容
- 11 コイネー
- 12 ローマ共和政の本質とアウグストゥス
- 13 ローマ皇帝と帝国の統合
- 14 「ローマ化」論争
- 15 ケルト問題
- 16 ローマ帝政期のギリシア
- 17 五賢帝時代と「3世紀の危機」
- 18 剣闘士競技
- 19 キリスト教の拡大
- 20 強制国家論の現在
- 21 ローマ帝国衰亡論
- 22 ローマ法典と社会
- 23 古代経済史論争
- 24 古代の奴隷
- 25 古代ローマの家族とセクシュアリティ

- 26 古代人の宗教1：犠牲
- 27 古代人の宗教2：神話と造形芸術
- 28 古代人の宗教3：国家と宗教
- 29 古代の科学：ガレノスを中心に
- 30 「古代末期」論争
- 31 ビザンツ帝国史の時代区分
- 32 ビザンツ皇帝とは何か

II 西洋中世史の論点

- 1 中世初期国家論
- 2 カロリング・ルネサンス
- 3 ピレンヌ・テーゼ
- 4 中世農業革命
- 5 中世都市成立論
- 6 ヴァイキングのエスニシティ
- 7 ノルマン征服
- 8 封建革命論
- 9 「封建制」をめぐる論争
- 10 教会改革
- 11 中世修道会
- 12 12世紀ルネサンス

- 13 十字軍
- 14 レコンキスタ
- 15 迫害社会の形成
- 16 13世紀の司牧革命
- 17 神判から証人尋問へ
- 18 儀礼とコミュニケーション
- 19 リテラシー
- 20 歴史と記憶
- 21 近代国家生成論
- 22 スイスの起源
- 23 タタールのくびき
- 24 ハンザ
- 25 14世紀の危機
- 26 ジャンヌ・ダルク
- 27 ブルゴーニュ公の宮廷文化
- 28 イタリア・ルネサンス

Ⅲ 西洋近世史の論点

- 1 世界システム論
- 2 世界分割（デマルカシオン）
- 3 コロンブス交換

- 4 スペイン帝国論
- 5 オランダの黄金時代
- 6 重商主義論と特権商事会社
- 7 資本主義論
- 8 東欧の辺境化・後進性
- 9 ヨーロッパとオスマン帝国
- 10 人文主義／文芸共和国
- 11 レス・プブリカ
- 12 主権／主権国家／主権国家体制
- 13 宗教改革／対抗宗教改革論
- 14 宗派化
- 15 社会的規律化
- 16 エトノス論
- 17 複合国家／複合君主政／礫岩国家
- 18 神聖ローマ帝国論
- 19 アンシャン・レジーム論
- 20 17世紀の危機
- 21 軍事革命
- 22 三十年戦争
- 23 イギリス革命
- 24 科学革命

- 25 魔女迫害
- 26 啓蒙主義
- 27 財政軍事国家論
- 28 啓蒙改革／啓蒙絶対主義
- 29 アメリカ革命

IV 西洋近代史の論点

- 1 フランス革命
- 2 イギリス産業革
- 3 生活水準論争
- 4 大西洋奴隷貿易
- 5 大分岐
- 6 民衆運動，民衆文化，モラル・エコノミー
- 7 階級論（ジェントルマン論・ミドルクラス論）
- 8 市民結社（ボランティア・ソサエティ）
- 9 消費社会
- 10 男女の領域分離
- 11 19世紀のジェンダーと人種
- 12 セクシュアリティ
- 13 アイルランド大飢饉
- 14 移民史論

- 15 アリエス論争
- 16 ボナパルティスム (第二帝政)
- 17 リソルジメント
- 18 農奴解放
- 19 南北戦争
- 20 第三共和政と改革
- 21 ナショナリズム論 (東欧からのアプローチ)
- 22 ナショナリズム論 (南北アメリカ・西欧からのアプローチ)
- 23 帝国論
- 24 女性参政権
- 25 「ドイツ特有の道」
- 26 社会主義

V 西洋現代史の論点

- 1 帝国主義論
- 2 植民地と近代／西洋
- 3 植民地と環境
- 4 第一次世界大戦原因論
- 5 ウィルソンとアメリカの国際主義
- 6 ロシア革命とソ連邦の成立
- 7 スターリンと農業集団化・工業化

- 8 世界恐慌
- 9 混合経済と福祉国家
- 10 革新主義とニューディール
- 11 ファシズム論
- 12 ナチズム
- 13 ホロコースト
- 14 第二次世界大戦原因論
- 15 冷戦の起源
- 16 ハンガリー動乱と「プラハの春」
- 17 ヴェトナム戦争とその影響
- 18 デタント
- 19 欧州統合
- 20 冷戦の終結
- 21 新自由主義
- 22 フェミニズムとジェンダー
- 23 オリエンタリズムとポストコロニアリズム
- 24 「短い20世紀」

欧文参考文献

おわりに

研究者名一覧

人名索引

事項索引

内容（「BOOK」データベースより）

本書は、古代から現代に至る西洋の過去に関して、真実=正解を求めて幾通りもの主張が戦わされているポイント、すなわち「論点」だけを集めたテキストです。「論点」に触れ、主体的に思考することで、歴史学ならではの醍醐味が味わえます。各項目は“史実”“論点”“歴史学的に考察するポイント”の3パートから構成され、語句説明やクロスリファレンスも充実。世界史の知識がなくとも理解が進む工夫が満載!

著者について

《監修者紹介》*本情報は刊行時のものです

金澤 周作(かなざわ・しゅうさく)

現 在 京都大学大学院文学研究科教授

《編著者紹介》

藤井 崇(ふじい・たかし)

現 在 関西学院大学文学部准教授

青谷 秀紀(あおたに・ひでき)

現 在 明治大学文学部准教授

古谷 大輔(ふるや・だいすけ)

現 在 大阪大学大学院言語文化研究科准教授

坂本 優一郎(さかもと・ゆういちろう)

現 在 関西学院大学文学部教授

小野沢 透(おのざわ・とおる)

現 在 京都大学大学院文学研究科教授

西洋史の論点集という楽しい本。あとがきによると、高校生、大学生、研究者、歴史教育者、一般読書人等の幅広い読者を対象とした本とのことである。

1 頁使って、本書の使い方が 6 例ほど書かれている。親切である。

構成は、1 テーマにつき 2 頁が使われ、史実 (約半頁)、論点 (1 頁～1 頁半)、ポイント (という題の復習・発展問題) からなる。外側に、注、文献が並ぶ。論点の数は、古代 3 2 個、中世 2 8 個、近世 2 9 個、近代 2 6 個、現代 2 4 個で、総計 1 3 9 個。

私的感想

○楽しかった。字も大きく、内容も整理されていて、読みやすい本である。

○上記の使い方 6 例の中には書かれていない使用法だが、時間のある方、西洋史全体に興味のある方は、とりあえず最初から最後まで読んでみることをお勧めする。本文約 3 0 0 頁、大した分量ではない。

○しかし、読みやすい領域、章となかなか難しい領域、章はある。まず、現代は現代である上に、おなじみの論点ばかりで、読みやすい。残りの古代、中世、近世、近代は、読者の得意分野により、難易度が異なると思う。個人的には、以下の通り。

○※古代・・なじみのない論点もいくつかあるが、ほとんどギリシャ・ローマ・ビザンツの話なので、おおむねスラスラ読める。

※中世・・苦手の上に、論点も内容もなかなか難しく、読んでいて、かなりつかえた。

※近世・・急に世界が広がった上に、大项目的な論点が増えて掴みにくい。内容もちょっと難しい。

※近代・・現代に近い上に、論点も内容も近世より易しい。

※それで私の難易度評価は、難しい方から、中世→近世→近代→古代→現代である。

○ポイント（という題の復習・発展問題）は難しい問題が多く、本文を読んで分かったつもりでいて、ポイントを読むと分からなくなるという弊害がある。個々の論点の学習を深めるには有用でも、通読の際には、原則、あまり読まない方がよい。

○全139論点についてコメントを書くと大長文になるので、以下、各時代から気に入った5論点を選び、簡単なコメントを付する。

一、古代

※『3、歴史叙述起源論』・・ヘロドトスの歴史家としての再評価。

※『10、古代ギリシアの連邦とその受容』・・ギリシャ・ローマの古典を受容した側の事情の歴史。これもまたギリシャ・ローマ史。

※『25、古代ローマの家族とセクシュアリティ』・・夫婦愛を重視する結婚への変化か、それとも、家父長権の衰退による「自由な」女性の登場か。両方？

※『30、「古代末期」論争』・・おなじみの大論点。『21ローマ衰亡論』の項目もあるが、そちらはあっさり。こちらはなかなか丁寧。「衰亡」「崩壊」はあったかなかったか。あったんでしょね。

※『32、ビザンツ皇帝とは何か』・・ビザンツ皇帝の本質とは何か。伝統か、キリスト教による権威付けか、戦う皇帝か平和の皇帝か。考えたことなかったな。

二、中世

※『3、ピレンヌ・テーゼ』・・カロリング時代の西ヨーロッパが農業経済を基本とする社会に「後退」する、というテーゼと反論。メロヴィング朝、カロリング朝はイメージがわきにくく、難しい。

※『9、「封建制」をめぐる論争』・・レーン制としての封建制は10、11世紀に戦士の領主層の中で一般化したという（？通説）に対する強力な批判。

宿題は日本との比較。

※『23、タタールのくびき』・・本書では数少ないモンゴル登場の論点。くびきのロシア史への影響。また、くびきが1480年に外れたという通説への反論。

※『26、ジャンヌ・ダルク』・・ジャンヌ・ダルクが入ったので、百年戦争は外されてしまった。ジャンヌ強し。誰もがジャンヌを呼び込み、担ぎたがる。「魔女」「乙女」「聖女」「民衆の代表」「愛国の乙女」「ジェンダー」。ポイントの宿題は「日本におけるジャンヌ像の受容の歴史」をまとめよ。

※『27、ブルゴーニュ公の宮廷文化』・・ブルゴーニュ公の宮廷文化を衰えゆく中世文化の最後の輝きとして描いたホイジンガ『中世の秋』への政治文化史的な反論と美術史的な反論。

三、近世

※『3、コロンブス交換』・・コロンブス上陸とそれに続く遠征が持ち込んだ旧世界の病気が、先住民を絶滅または著明な人口減少に追い込み、新世界から持ち込まれたジャガイモが主食となって、19世紀の人口爆発の条件を整えた。説得力高いクロスビー説。

※『9、ヨーロッパとオスマン帝国』・・ヨーロッパに対するオスマンの優位が解消されるのはいつか。東方問題の始まりはいつか。オスマン帝国は衰退したのか、移行したのか。

※『11、レス・プブリカ』・・republicの語源がレス・プブリカで、意味は「公のもの」。

レス・プブリカは君主政・貴族政・民主政のどれを通じても実現できるとマキヤベリ。君主政下のレス・プブリカ議論。

※『15、社会的規律化』・・絶対主義における世俗的な社会的規律化、宗派教会による宗派化的な規律化。権力に頼らない当事者間の紛争解決。

※『25、魔女迫害』・・ポピュラーな大論点。魔女裁判が16・17世紀に多い理由。熱狂説「宗教改革の熱狂が背景」、絶対主義国家成立過程説「神と王権の双方の敵である魔女」、一番すごいのは護符否定結果説「護符による魔女対策の有効性が宗教改革で否定されてしまったので、→（告発して殺すしか方法がなくなった）」。

民衆の働きかけ、民衆文化の影響が重視される方向。

四、近代・・以後は簡単に。

※『1, フランス革命』・・・研究多数。星雲状態。

※『5, 大分岐』・・・19世紀以後の西欧と中国の経済格差の拡大の理由。

※『12, セクシュアリティ』・・・ジェンダーとフェミニズム論点が三つ続く。その一つ。

※『25, 「ドイツ特有の道」』・・・20世紀前半の破局へと至るドイツの歴史を民主主義の脆弱さに求める「ドイツ特有の道」論の批判。

※『26, 社会主義』・・・21世紀に社会主義研究をする意義、社会主義とオリエンタリズム、社会主義と連帯主義。

五、現代

※『4, 第一次世界大戦原因論』・・・繁栄の中の格差の原因の説明として、一番わかりやすいのがナショナリズムだった。被害者意識的な民衆心理と好戦的自衛論。

※『7, スターリンと農業集団化・工業化』・・・ネップの評価とネップ放棄の評価。ロシアでのスターリン再評価。

※『10, 革新主義とニューディール』・・・革新主義とニューディールは連続するか。革新主義者は何者か。革新主義のグローバル性。

※『11, ナチズム』・・・ナチスは近代化を進めたのか。それとも近代の病理か。

※『15, 冷戦の起源』・・・ソ連が原因の正統派。アメリカが原因の修正派。冷戦後のポスト修正派は正統派に接近。

私的結論

○今後、大変お世話になると思う。